

アジアのビジネス戦略を考える ~日本のナレッジとアジア・オセアニアの環境保全~

SDGs(持続可能な開発目標)をテーマにしたシンポジウム「関西SDGsサミット」SDGsからアジアのビジネス戦略を考える。日本のナレッジとアジア・オセアニアの環境保全」が、このほど大阪市内で開催された。公益財団法人 りそなアジア・オセアニア財団が主催。財団設立30周年記念事業の二環として、基調講演とパネルディスカッションが行われた。

開会あいさつ 趣旨説明



公益財団法人
りそなアジア・オセアニア財団 理事長
(株式会社りそな銀行副会長)
池田 博之

今回は30周年記念事業ということで、従来の経済セミナーと環境シンポジウムを併せた企画とさせていただきます。経済と環境について考えるキーワードとして、企業経営において大きな課題となっておりますSDGsを取り扱います。

SDGsへの取り組み方やアジア各国との関わり方、環境ビジネスへの取り組み方など、皆さま方にとって、良い意味での問題提起や課題解決へのヒントになれば幸いです。



基調講演①「E.H.ハンターの挑戦からSDGsへの取り組みへ」



日立造船株式会社
代表取締役会長兼社長

谷所 敬氏

E.H.ハンターの挑戦

E.H.ハンターは当社の創業者です。この関西の地で多くの新事業を立ち上げました。

ハンターは1843(天保14)年に北アイルランドで生まれ、日本に着いたのが22歳のとき。大阪市此花区で造船事業を始め、1881(明治14)年4月1日に大阪鉄工所を創業。これが後の日立造船です。

三菱重工、川崎重工、IHIなどの造船所は全て官督の払い下げですが、ハンターは全くの民間人で事業を立ち上げていきました。「挑戦の精神」が当社のDNAです。

環境の日立造船の グローバル展開

戦後日本の造船業は1970年頃ヨーロッパを抜いて世界一となりましたが、2000年頃には逆に韓国に抜かれて、今は韓国と中国が1位争いを

創業者の精神を受け継ぎ、社会に役立つ技術を

しています。我々は2002(平成14)年に造船業を分離しました。造船をやる前から陸上部門の強化をしてきました。例えば、船用エンジンはデンマーク、自動車プレスはアメリカ、ロケットはフランス、製鉄機械はドイツ、海水淡化プラントはアメリカ。こういった欧米の技術を導入して、現在の日立造船が残っています。現在の事業は環境・グリーンエネルギーで、環境の日立造船といわれるものになりました。

メインの事業である、ごみ焼却施設を世界で911件、建設してきた実績があります。日本とアジアの大半は日立造船が建設したものです。アジア・オセアニアでは、ほとんど日立造船が納めてきています。国別の取り組みは、中国、ベトナム、インド、タイ、マレーシアで環境ビジネスを展開しています。

SDGsの取り組み

SDGsへの当社の取り組みですが、まず船用SOCRシステムです。当社は船用エンジンを50年以上も作っており、NOx(窒素酸化物)除去装置という触媒も作っていることで、これらの技術を融合させて、船用SOCRシステムという名前を売っています。これを適用することにより、海の上の環境

を浄化します。

続いて水害防止です。フラップゲート式水害対策設備は、津波は直接止まらないかもしれませんが、高潮になったら止める設備で、水の浮力によって自動で立ち上がりません。ラオスのグリーンガス製造・供給プロジェクトは、捨てられてしまう電力をタンクにためおけば何時でも使えますから、メタンに変えてエネルギーを有効利用しようというものです。全固体系リチウムイオン電池は、全部が固体で温度領域が広く、非常に長寿命です。

最後に、洋上風力発電です。陸上風力は、そんなに珍しいものではありませんが、現在、日本では洋上風力の実験設備が5つ動いています。そのうち3つは、当社で浮体構造物を造らせていただきました。日本は排他的海域が非常に広いので、洋上風力発電が、いつか日本のエネルギーを救うということ、グリーンエネルギーである洋上風力発電に力を入れております。

Sustainable(持続可能な)社会に貢献する企業として、これからも世の中の役に立つ技術を作っていく方針です。SDGsへの取り組み事例を紹介しましたが、その中で皆さま方へ何か一語でもお伝えしたいことがあります。また、提案いただいたことについてお返事をいたします。

基調講演②「SDGs経営の最新動向と今後の課題について」



グローバル・コンパクト・ネットワーク・ジャパン 代表理事
富士ゼロックス株式会社 エグゼクティブ・アドバイザー

有馬 利男氏

CSR(企業の社会的責任)経営、その経営における複眼的な思考。これがSDGsを進めていくうえで、重要なキーワードとしてあります。

企業はそれぞれのステークホルダー(利害関係者)に対して、社会的責任を果たすべく活動を行うわけですが、そこには様々な課題が出てきます。大切なのは、これを単なるイベントとして

はいけません。CSR活動として「これをやっています」と報告書に載せる。それは決して無駄ではない、悪いことではないのですが、こういう一連の活動を、例えば、横に広げていく。あるいは、営のシステムを考えてみる。あるいは、人材育成の材料にしていく。そういう形で経営そのものの質を上げる。そういうことになっていくのが、CSR経営の考

SDGsの推進には複眼的な思考が重要

え方ではないかと私は思っています。次に、単純な一つの思考ではなく、経営です。複眼で幅広く、複数の視点からものを考えることがSDGsを推進する上で重要ではないかと思えます。

Inside-OutとOutside-In。Inside-Outとは自分たちが今、やっている事業、やり方、ビジネスモデルをベースに、もう少し社会に広げていく。Inside-OutからOutへ広げていく。社会に広げていく。そういう考え方は、それ自体は別に悪いわけではない、重要なことなのですが、それだけを企業がやっていると、SDGsが掲げている「誰一人取り残さない」というビジョンには、なかなか届かないでしょう。企業というものは、世界でも必要な資源をふんだんに持っている。SDGsが指摘している、いろいろな課題を引き起こしている当事者でもありません。

社会課題にもう少し企業が踏み込んでいく。Outside-InからInに引っ張っていく。Inとは、自社のビジネスモデルとして持続的に継続できるソリューションを作り上げていくという意味です。そこにならなければ、単なる社会貢献で終わってしまいます。それは、企業としては持続できないです。そういう意味で、Outside-InからInに持つ。この複眼的な思考、内側から持ち上げて外へ引っ張り出していく。外側から持つ。この両方が必要ではないかと私は思っています。

今は少子高齢化や成熟化の時代。収益や効率だけを追い掛けている企業が持続する、もうそういう世の中、そういう時代は終わっているのではないかと、見つけていかなければ企業は存続できない。そういう時代に新しく入ってきたのではないかと、そんなふうな思いがあります。